

# OPEN / GRINDHOUSE TIMES



NO. **01**

2018.Dec.  
10<sup>mon</sup> ▶ 15<sup>sat</sup>

バストリオ  
オープン・グランドハウス

2018年12月10日(月)~15日(土)  
開館時間 12:00~21:00  
会場 吉祥寺シアター

料金 入場無料  
WEB <http://busstrio.com/open-grindhouse>  
企画制作 吉祥寺シアター/バストリオ

オープン・グランド  
ハウスタイムスとは

バストリオが吉祥寺シアターで  
行なった公開滞在制作「オープ  
ン・グランドハウス」について、  
参加者や観客がそれぞれの視  
点から描いたアーカイブ冊子。

## 参加メンバー

芸術家  
秋良美有  
俳優  
Gakkun  
女優/演出家  
小川沙希  
サウンドエンジニア/中年男性  
岡村陽一  
クリエイター  
黒木麻衣  
演出家/映像作家  
今野裕一郎  
俳優/デザイナー  
嵯峨ふみか  
俳優  
酒井和哉  
ダンサー  
坂藤加菜  
デザイナー  
新穂恭久  
コーヒー屋BRÜCKE  
杉浦俊介  
よろずや  
タカラマハヤ  
料理人  
西田宗由  
ニャー  
栗野有香  
パフォーマー  
橋本和加子  
アロマライフアドバイザー  
萬洲通擴  
女優  
半田美樹  
音楽家/サウンドアーティスト  
松本一哉  
映像撮影  
和久井幸一

## 吉祥寺シアタースタッフ

大川智史  
佐藤梓  
村上佳苗  
吉田恭大

バストリオ  
オープン・グランドハウスタイムス  
2019年5月10日(金)発行

デザイン 嵯峨ふみか  
編集協力 吉祥寺シアター/バストリオ  
発行所 吉祥寺シアター  
〒180-0004  
東京都武蔵野市吉祥寺本町1丁目33-22  
印刷所 ウェブプレス



## オープン・グランドハウスとは

吉祥寺シアターのレジデンスプログラム「みせびらき」の一環として、2018年12月10日~15日までの6日間に渡ってバストリオが行なった公開滞在制作。「多くの人に劇場と出会ってもらおう」というコンセプトのもと、通りに面した搬入口を開け放ち、誰もが訪れることができるリビング(生きている場)のような場を、劇場内に立ち上げることを試みた。「かきまわす」という意味を持つグランド。期間中は「衣・食・住」にまつわる、様々な表現者たちによる企画が同時多発的に進行された。

## バストリオとは <http://busstrio.com>

今野裕一郎が主宰するパフォーマンスユニット。各ジャンルを横断し、創作することを目的とする、シームレスな場づくりの集団。自然や都市のもつ感触、役者の身体から出てくる生理や質感を活かし、フラットで豊かな作品を生みだす。生演奏による音と役者の声、ものと身体、光と影、テキストや映像を断片的に扱い、ドキュメンタリー編集の技法を用いて観客の想像力を喚起する演劇をつくりあげる。東京・足立区での半年間のワークショップ「こどもえんげき部」や、日本各地を音楽家とツアーで回る活動も行なっている。これまでにコラボレーションしたミュージシャンは松本一哉、杉本佳一、minamo、滝沢朋恵、空気公団、タカラマハヤ、角銅真実、三日満月など。



photo : WAKUIKOICHI

2018年のやたらと冷える年忘れの夜とある俳優と会ったときのことだ。それは酒席でたわいもない話をしていた矢先、自分でも唐突だと自覚しつつも、パストリオの作品について、一方的にまくらしたた深更であった。その俳優は小劇場シーンで手広く客演しており、著名な演出家の作品にもたびたび参加している。ところがいわゆる「ポストドラマ世代」のキャンビーや作品にあまり明るくないようで、パストリオを観たことがないという。まあキミも若いんだし、いろんなジャンルを観たほうがいいよと先輩風を吹かせたのだが、なんなのかながら忘却の彼方だが、これまでのパストリオの活動や12月に行なわれた「オーブン・グランドハウス」の試みについて説明したところ、その俳優は私にこう尋ねる。

「それって演劇なんですか？」

弁解するわけではないけれど、パストリオについて、わりと的を射た解説をしたつもりである。一方でその俳優も、舞台におけるインスタレーションの要素についてもたたくもって知見がない、ということもない。

しかし、「それって演劇なんですか？」の問いに思わず詰まってしまったことは、あとになって振り返るとそれほど悪いことではなかったと考えている。パストリオがこれまでやってきたことは、筋立てで説明できるものではないし、作品のなかで多分にノバールな伝達が繰り広げられている。そもそも批評家だとかライターだとか、言葉を費やしてなんとかやっつけようとする者が難儀する作品を意図してつくっている人たちのなかから、思わず詰ますることは別にライターの敗北ではない。関係ないが何かを批評するとき、言葉で完結しようとするあまり、曲解し、自分の思考にとらわれ、自縄自縛のものになっている。若い批評家のなんと多いことかと、茫然とすることがある。生業が書籍編集者である私は、勝手ながら未来の言論空間のあり方を危惧したりもするのだが、まあ滞在制作を敢行した。それから、パストリオのフアターを集約的にパフォーミング化したのが「オーブン・グランドハウス」だ。

劇場で衣食住を考察するという試みであるこのプロジェクト、12月10日から15日の6日間の滞在制作という形で、吉祥寺シアターは開放された。劇場の正面入り口でなく、搬入口から人々が出入りするというアイデアは、吉祥寺シアターを映画館と勘違いしていた地元の人たちにもインパクトが大きかったはずだ。でなくともいい、「昨日起こった出来事を話す」こともできまわらない。それらは会場のなかで「コーヒー」になったものとして展示される。「コーヒー」になったものは偶然の積み重ねで増えていく。ひたすら偶然を面白がる。そんなことを、今野と参加者・出演者たちは共有している。

吉祥寺の街でかき集めた古着は、劇場のなかでアレンジされ、パフォーミングの衣装となる。「MOUNTAIN OF CLOTHES」プロジェクトとして、古着は再生された。さらには吉祥寺を練り歩き、ワークショップを受けに来た人や参加する俳優らが2分間のフィックスで映像を撮影する。iPhoneで記録された動画はその場で編集され、吉祥寺の街を定歩測測した『たれかのどこか』という映像作品として発表される。参加者のひとりである映像作家・和久井幸「による『回避』」は、ライブ映像が流され、参加者が運んできた飼いの散歩映像も展開する。そうしたこと劇場の内外で同時多発的に広がっていくため、すべてのコンテンツを網羅的に確認することはできない。同時多発的かつ街を巻き込んだインスタレーションとして思い出されるのは、1977年、阿佐ヶ谷を舞台に寺山修司が手掛けた市街劇『ノック』だ。観客が移動しながら街中

ともあれ勢い余ったこの脱線を正面に詫言として、むしろ、そこで詰まることが『オーブン・グランドハウス』を語るうえで重要だと思えたのだった。

幾作ものパストリオ作品を観てきたが、『オーブン・グランドハウス』はこれまで以上に観客のあいだで育まれる伝達がある。精神感応のように深く行き交い、劇場における舞台と観客をシームレスな場所にしていたことを、この作品で強く感じさせられた。本作について詳述する前に、少し遠回りだけれど、私とパストリオとの出会いを振り返っておきたい。

2014年だったと思う。パストリオの中心のメンバーである橋本和加子と取材の現場で知り合う機会があり、そこから彼らの作品を重ねて観に行くようになった。主宰は今野裕一郎と知り得たのは、パストリオの野性ど窟まれた「海ではない陸ではない」(2005年)神保町 試験室の上演後だった。シークエンスの繊細なところがよかったです。作者である今野自身の繊細さによるものかもしれないと、作品を観、本人と言葉を交わしたとき、直感的にそう思った。「海ではない陸ではない」では、オオミの移動距離について語るシーンがあり、それはのちに「ベスト」(2018年)「三鷹 SCHOOL」(ネコのまはたきについて語られるのを確認するにつけ、舞台上に水や打楽器音を用いることなどを含めて、今野の自然科学全般の関心の深さを知った。

制作のために沖繩に旅立つたという「わたしたちのことを知っているものはない」(2016年)「京都・punto」板台・poolで、今野が描きたいもの、大切にしているものがよりダイレクトに伝わってきた。決して本作は沖繩がメインテーマとなっていないが、辺野古や高江にも行きました。そして、感じるものがたくさんありましたし、わからないことがたくさんありました。「フライヤーより」とあるように、そこから

行なわれるパフォーミングを見つけないで、実験だが、今野は寺山から着想を得ているわけではなかった。街中に非日常を挿入し、過激さとパッシング性で、見世物の復権を狙ったアンダーグラウンド、カルチャーと、日常性や劇場の境界線を塗りつぶしていくことを主眼とした今野の「オーブン・グランドハウス」では、着想もプロセスも異なる。彼はシンプルに生活を愛し、「たれか」に「いる」ことを許容し合う空間を手付けようとしたに違いない。「たれか」に「いる」の「と」は、劇場であり、吉祥寺という街であり、足を運んだ人たちが思いを馳せる別の場所でもある。

14日と15日に発表されたパフォーミング『グランドハウス』は滞在制作で起こったことと「コーヒー」の対面を得たモノ、開放された劇場で出会った人たちが文字通り混ざり合って作品として立ち上げられた。催しに足繫ぐ通った近所の小学生もパフォーミングに加わり、すべての出来事が、存在が作品に帰結しているようであり、それは反対に、作品が、あらためて私たちの「衣食住」を強く味わさすかけを与えてくれるものとして機能しているようにも感じさせられたのだ。

生活と芸術が寄り添って互いを支え合う。それはパストリオにとって、何も特別なことではなく、彼らは常にそうして作品を立ち上げてきた。そこにいた私たちも、もはや演者ともいうべきであり、「オーブン・グランドハウス」の担い手のようにそこに存在していた。今野は「日常と非日常、舞台と客席、演者と観客、それらをすべてフラットにとらえ、シームレス化していくことを追求した。競争社会が激化して、人とのあいだに心理的な深い河が流れ、国境に巨大な壁を建設しようとする大統領がかの大国の選挙で選ばれた。よいうな現実がある国内外の現代社会において、諸問題を放置すれば垣根は高くなるばかりだ。境界線を塗りつぶそうとする彼独自の、そんな情勢を見据えてのこととは思われないが、河があろうと海がいがいに深かろうと、この世は地続きで語れることの方が多。

感じ取った風の音や空気の流れ、その気候さえも小さな会場のなかに内包されたような心地よさが、作品に横たわっていた。終盤では、役者たちが個人的に体験したエピソードを語るシーンが断片的に設けられる。稽古場での発表によって、今野がセレクトし演出をつづける手法がより鮮明になった作品でもある。ドキュメンタリーの映画監督として活動をスタートさせた今野は、バイアスをかけず役者たちの持っているものを見つめていく作業を大切にしている。沖繩で感じたことと舞台上の作業にても、まさしくそれは取材の成果であり、彼にとって、舞台作品を手がけることは、ドキュメンタリーの手法論に通じている。今野の作品には、常に自然科学とドキュメンタリズムが同居している。かつて週刊誌記者の仕事をして、いた私は、今野のドキュメンタリストとしてのフィロソフィーに「まっとうなも」を感じている。とりわけ「セーショナルな見出しを掲げた1週刊誌業界においても、取材でウラのとれないものを見切り発車で掲載すること、自殺行為そのものだ。結論ありきで強引に取材するイメージがあるかもしれないが、実際の現場は慎重だし、記者だっていたいには低姿勢だ。不思議なことに、優秀な記者であればあるほど、物腰は柔らかい。できれば話したくないことを相手から聞き出すのだから、よく考えれば当然のことだ。役者に対して自分の物差しで見ないこと、決めつけないことを徹底している。今野に結論ありきの考えはないし、予想しなかったことを受け止める力は彼のドキュメンタリストとしての属性から培われたものではなからうか。

パストリオは公演のみならず、足立区の小中学生たちと作品をつくる「こどもえんげき部」(毎月月曜日)に北千住 BUOYで無料提供している「こども食堂」(大人は300円)といったプロジェクトを展開している。横浜の急な坂スタジオでは「扉の開き方」(Sleep Slope Showcase vol.2)と2年連続で

6日間にわたって開放された催しのすべてを見ることはできなかった。最終日の15日、吉祥寺シアターに到着したとき2ステージ目の「グランドハウス」はすでに終わり、各々がバグシの準備を始めていた。いわば解散までのプロセスを見せる滞在制作でもあり、そのあいだも、何をやっているのか気になった人が出入りしている。

みな「忙しかつ片付けているあいだ、ここで起きたことをノートにまとめようと思いついた。椅子に腰かけたが、しかし、ただぼんやりとしてみても悪くないとふと考えをあらためて、手を止めることにした。劇場の片隅で、彼らの作業を眺めている。ぼんやり眺める。本当にそれは、ぼんやりとした行為だ。ここではない場所を思い出して、彼らとはまた別の人のことを思っていた。久しぶりに思い出した人々が頭に浮かんで消えた。ここに「いるけれど、ここにいない」ということでもある。やがて存在と不在もシームレスになっていくような気がした。そういえば「オーブン・グランドハウス」が始まる直前、吉祥寺シアターで今野にインタビューした際、彼はこんなことを話している。

「役者やミュージシャン、役者でない人も参加者にいます(中略)参加者が途中で「ここにいられないや」と思ったら来なくてもいいんで」

会期中「劇場内での居方がわからない」と言った参加者がいた。この場所はどういうかと思いきや、あくるその言葉は誠実だと思った。今野はむしろ、わからないままそこにいようというのを演出家として求めているのかも知れない。どういいうかにそこにたつてかまわない、いなくともいい」「ここにいない」「いなきほど大きな隔たりはない」のだから。

あの日、夜中にたくさん話しかけた俳優には、今度会ったときにあらためてパストリオについて、演劇でもあるし、演劇ではない、かもしれない。演劇を飛び越えたことをやろうとしているのだと思ふ。観に行き「こどもえんげき部」だ。

## 田中大介

1977年生まれ。ライター／編集者。週刊誌記者。映画雑誌編集者などを経て、現在は徳間書店・学芸編集部に在籍。同社で書籍編集を担当しつつ、ライターとして「えんげき」週刊現代「SPICE」などの媒体や、上演パンフレットや演劇DVDのライナーノーツも執筆。下北沢・本屋B&Bでは舞台にまつわるイベントを多数企画・出演。





# OPEN GRIND HOUSE TIMES

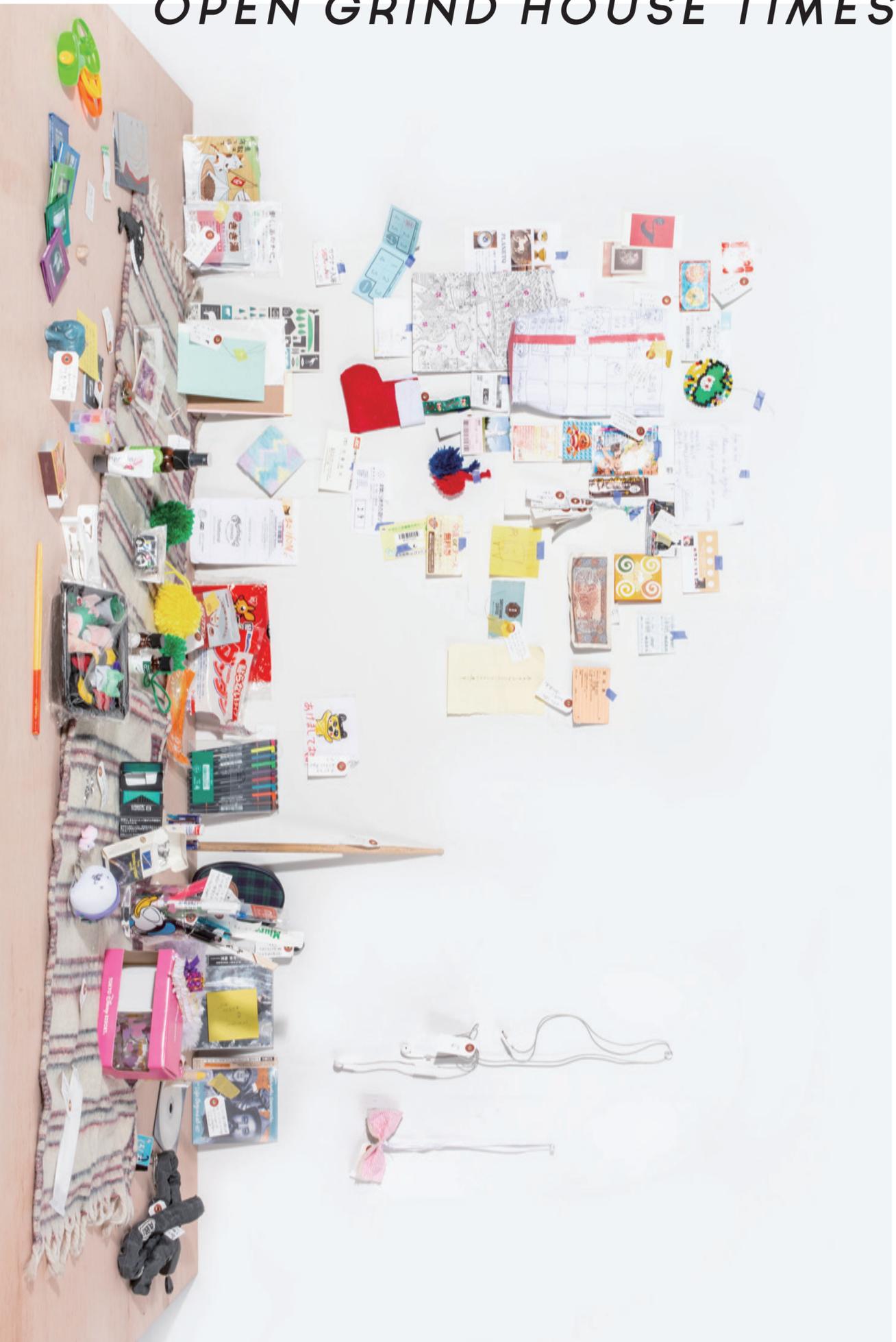


Photo : comuramai / takaramahaya

# OPEN GRIND HOUSE TIMES



# Grind House Coffee で物々交換したモノたち



## ふうちゃんが作ったもの **半田**

1日目2目にきてくれて、犬のあんちゃんと一緒にお話をしていた3歳の女の子、ふうちゃんが作ったものです。貼ってある動物をブタさんと呼んでいて、「ふうちゃんね、ブタさんきらーい!うさちゃんとかは好き!でもブタさんきらーい!」と何度も笑顔で言っていました。その嫌いの言い方が、好きと言っている、うさちゃんの時よりも何倍も笑顔で好きそうに見えたのが、とても印象的で可愛らしかったです。その時、好きと嫌いは表裏一体なんだなとなんとなく思ったことを覚えています。



## レインボースプリング / にじいろのくるくる **小川**

わたしはこれの名前を知りませんでした。彼女が名前を付けて初めて、これの名前について考えたことがなかったと気がつきました。とにかく懐かしいおもちゃです。わたしはこれの使い方をヨーヨーのようにびよびよさせて遊ぶものだと思っていました。びよーびよーと伸び縮みするバネの動きと、その動きに合わせて、また影も伸び縮みするのがおもしろいです。そして手に伝わる感触から広がり、身体ごと上下に揺れて全身運動となっていきます。ただただ無心となって遊びます。橋本さんのお家ではガンバと呼ばれていて、階段や段差をびよーん、びよーんと下って行くのを見つめる、という方法で楽しんでいました。家族でその姿を、がんば!がんば!と応援していたそうです。

## 白い石 **小川**

学校の校庭で見つけたそうです。ジュースと交換するために持ってきてくれました。とても小さいので無くないように、1日中、ずっと、左手に握り締めて、持ってきてくれました。

## 短歌の素 **小川**

このペンで短歌を書くご夫人の旦那様が持ってきてくれました。ペンのインクはほとんど使い切っておりま



## でんでん太鼓 **小川**

とても仲の良い友人の結婚式の余興で、でんでん太鼓を両手に持って歌い踊った、その時の思い出の品だそうです。もう一つのでんでん太鼓は、思い出に、と、お家で保管してあるそうです。



## 絵を描く下敷き **半田**

オープングラインハウスの美術を主に作ってくれたアキラちゃんが交換してくれたものです。もともと絵を描いていたのですが、雨の雫や、雪の結晶、シミなど、自然発生的に起こるもの美しさに気づいてから、絵を描かなくなったそうです。これは、久しぶりに絵を描く機会があった時に下敷きに使った紙です。偶然できたこの絵を見た時に、彼女は絵を描かなくなった理由を再認識しました。それがなかったら、まだ絵を描き続け、こうしてオープングラインハウスで美術をすることもなかったと思います。いろいろな流れがあってこうして一緒に過ごしているんだと、変化していく美術を見ながら、不思議さと嬉しさを感じました。

## 角海老ボクシングジムの手動式ライト **酒井**

その男は白くて大きい犬の“あんちゃん”と共にやって来た。彼が交換してくれた赤いライトは手動式で、取っ手を握って押し込むと点灯する仕組みになっている。災害時や非常時に役立つように作られたものなのだろう。白い文字で「角海老ボクシングジム」のロゴがあしらわれている。

「俺の息子はボクサーだったんだよ」

男は低い声で話しはじめた。ボクシング界の仕組み、興行を成り立たせる為の暗黙のルール、プロになる為に何回勝てばいいのか...etc. ボクシングのことを何も知らない私には正確には覚えられないことばかりだったけれど、彼の話す熱量は充分すぎるほど伝わった。がっしりとした体躯や、全身から発せられるような野太い声からしても、息子の方ではなく彼自身が元ボクサーだと言われても納得しただろう。

当然それまでの話の流れから「じゃあ、息子さんはこのジムに通ってたんですね」と聞いてみた。「いや、違うよ」当たり前のようにそう言う、男はまた白くて大きい犬と共に帰って行った。

## ムビチケ **酒井**

2枚のムビチケ。表面には「来る」というその映画のタイトルと共に、メインの俳優たちの写真なんかが配されている。その映画について何の知識も持ち合わせていなかった私は、直感でこれはホラーかなと思って尋ねてみた。果たしてそれはホラー作品であり、その人は前日にそれを観たという。ここ吉祥寺シアターのご近所、吉祥寺オデオン。

彼女は吉祥寺シアターで電話受付の仕事をしている。彼女がこのムビチケとコーヒーを交換してくれたのは、我々が吉祥寺シアターでの滞在制作を開始してから2日目の夜のこと。前日には「ごもおとな食堂」を開催しており、吉祥寺の街の人たちがたくさん立ち寄ってくれた。彼女も劇場の上にある事務所で仕事を終えた後に顔を出そうと思っていたのだけれど、「劇場関係者が食べてしまっ、街の人たちが食べられなくなってしまったらダメだ」と遠慮し、それで映画を観に行くことにしたのだ。なんて観客(街の人)と劇場のことを想いやる人だろう素敵!と、ちょっとばかり感動しつつ話をした。映画好きの彼女は、なかでもホラーが大好きでよく観ており、この作品もそのうち観るつもりだったという(私はホラー作品にあまり心が動かせない人間なので、この作品のことをほとんど知らなかった)。観た感想を聞いてみたところ...いや、それは皆さんの想像にお任せした方がよさそうです。

後日、必要があって吉祥寺シアターに電話をかけた時、窓口の方がとても親切に対応してくれた。声を聞いてもしやと思ったが、それがこの時の彼女だった。「わたしもカレー食べたかったです!!」あの日そう口にした彼女にも、ぜひ西田さんのカレーを食べて欲しかった。

## シアトルのバスケットチームのハンドタオル **橋本**

これを持ってきてくれたのは気の弱そうな中年の男性だった。最初、彼のカバンからこれが出てきた時のインパクトはとても強烈だった。このハンドタオルにプリントされたシアトルのバスケットチームのロゴは何の絵か分らないくらいに色褪せてしまい、所々ほつれがあるはじの方にくっついたタグにいたっては文字の形跡すらなく解体されたタグの破片が白い糸くずみみたいにピロロとタオルにつくっているだけになってしまっていた。それもそのはずで、このハンドタオルは彼が中学時代から使っているものだった。小さなハンドタオルの中には彼の沢山の思い出と汗が染み込み小宇宙のような仕上がりになっている。

中学時代、大阪に住んでいた彼は当時バスケ部だったそうだ。ある日、このシアトルのバスケットチームが東京にやってくることを知り、心躍らせた彼ははるばる東京まで試合を観戦しにきたそうだ。その時に買ったのがこのハンドタオルだった。そしてこのハンドタオルはこうして交換されるまで彼の持ち物の中でも古株だったらしい。そんな大切なものを頂いてもいいんですか?と尋ねると「引き出しを開けた時とかに見て「まだあったんだ」って思うくらいなんで大丈夫です。」とサラッと話す彼はほんとにそう思っているようだった。

最後にこのハンドタオルに付けるキャプションを書いてくれた彼は「ヴィンテージものっぽく書いてみました。」と少しだけワクワクした顔で私にキャプションを渡してくれた。今日から彼の家の引き出しの中身が少し変わる。小さなハンドタオルが占めていたスペースを見て彼はどんなことを感じるんだろうか。

## ひらがな練習帳 **半田**

大学生くらいの女の子がくれました。ひらがな練習帳。付き合っている彼氏が、自分の字の汚さに危機感を感じて、一緒に練習した紙です。どの字が一番汚いか、全部を書き出した結果、「な」という結論に至り、練習しています。中には彼女の字も混じっています。話を聞き進めると、二人は遠距離恋愛をしていて、久しぶりに会った時に練習をしたそうです。せっかく久しぶりに会ったのだから、もう少し特別なことをやったら良いのに、と少し思っていました。ただこうやって、何気ないことをやるのがすごく素敵だなと思い、二人の関係性も感じ取れたような気がして、好きでした。

## 赤ちゃんの命名権(候補) **酒井**

1ヶ月くらいぶりに会う友人Yのお腹は、また少し大きくなったような気がする。劇場内で行われている作業や展示をゆったりと見て回りながらコーヒーと交換するものを考えていた彼女は、おむろにテーブルに向かい合うと鉛筆を動かしはじめた。

Yは女優であり、自身が主宰するユニットでは赤ちゃんや幼児向けのワークショップを開催している。後日ここ吉祥寺シアターでワークショップを開催することもあり、遊びに来てくれたのだ。お腹のなかの赤ちゃんと一緒に、今回の企画で皆さんがコーヒーと交換してくれたモノには、本人にキャプションを付けてもらっている。Yはキャプションだけを私に差し出しながら、これは来年生まれてくる自分の子供の命名権を考

ることができる権利だと説明してくれた。そして最後に「候補ね。あくまで」と付け加え、ふふふ。と笑った。Yには、お腹のなかにいる赤ちゃんも「げっぶ」をすとか、男の私には未知の話をいろいろと聞かせてもらったけれど、赤ちゃんが裡で動くことでお母さんのお腹の表面に赤ちゃんの手の形が浮かび上がるという話には痺れた。

生まれてくる赤ちゃんは女の子らしい。私は、両親に命名権を与えられた長男によって、彼の初恋の人の名前をつけられたという高校時代の後輩のエピソードを思い出していた。「えー、そんなの絶対やだー!」とY。私だってそんなのは嫌だ。



## リスの写真 **橋本**

この写真を持ってきてくれた女性は「せっかくだから吉祥寺の町にちなんだものを」ということで、この写真を持ってきてくれた。吉祥寺シアターから徒歩数分の所にある動物園内のリス園に行った時に撮ったリスの写真だそうだ。ドアップで撮られた写真にリスの警戒心のなさが見て取れる。その人が話してくれたエピソードの中で印象に残ったものがある。

「ある日、リスが大脱走してみんないなくなっちゃった時があったんですけど、数日後に帰ってきた時に人数が増えていたんですよ」その話を想像して笑ってしまった。リスのアドベンチャー。脱走中にあったことはリスだけの秘密で、私たちは想像するしかない。



## 氷結 **酒井**

トートバッグから無造作に取り出したビニール袋。選んで見える袋の中のそれを見て、おっ、と思った。少し恥ずかしそうに笑いながら、やはり無造作に取り出した氷結の缶をカウンターにこれまた無造作に置く。

20代であろうその女性は、夜の吉祥寺の街にとでもしっくり馴染んでいるように思えた。てっきり吉祥寺に住んでいるのだろうと思って話を聞いていたが、吉祥寺に来るのはここ(吉祥寺シアター)の近所に住んでいる友達の家に来る遊び(飲み)に行くだけだという。その夜も彼女は飲んで来た。友達の家で、その時に、ここ(吉祥寺シアター)でなにやら面白そうなことをやっているらしいと聞いて、コンビニで酒を買い足したついでにふらっと寄ってみたのだ。「2本買ったんですけど、1本は私が飲んじゃったんで」コンビニからここまで来る間に飲みきったのだろうか。そんなに酒が好きなのに、この最後の1本をもらってしまっ果たしていいのだろうか。そんなことを思いながら、快活に話す彼女の顔を覗き込む。

「で、お兄さんはここでなにやっている人なんですか?」

ここから徒歩数分圏内にあるというその友達の家に行って、一緒にこの氷結を飲んでお喋りしたらきっと楽しいだろうなあ。慣れない手つきで淹れたばかりのコーヒーを彼女に差し出ししながら、そんなことを考えていた。



## 途中で切れたアンちゃんのリード **橋本**

OGH1期間中にミシマさんというおじさんとアンちゃんというラブラドルが2日間滞在した期間があって、そのアンちゃんの使わなくなったリードをミシマさんはコーヒーと交換してくれた。

この途中で切れたリードはミシマさんの車のほじに眠っていたらしい。革製のこのリードは持つとずしり重みがある。アンちゃんもミシマさんもとてもでかくて、このリードの重みは彼らのイメージとぴったりだ。二人は2日目以降不在だったので大きな身体2つが占めていた空間がぼっくり空いてしまい、不在感を感じずにはいられなかった。

「こいつは本当は盲導犬のテストを受けたんだけど、人が隣に来ると喜んじゃうだろう?だからこいつは試験に落ちたんだよ」

2日目のある時間。私がアンちゃんの前座に座っていた時、隣にやってきたミシマさんが話してくれた。そう話すミシマさんの口調にはアンちゃんへの愛が満ちていて、アンちゃんはずっと今を目で見て見つめながら、静かにミシマさんの愛を受け止めているようだった。



# COLLECTION



model:gakkun



model:handa miki



model:hashimoto wakako



model:sakai kazuya



model:comuramai



model:takaramahaya

Photo by comuramai / takaramahaya



# MOUNTAIN OF CLOTHES

新作パフォーマンス『グラインドハウス』のための衣装をつくることをきっかけに、

立ち上がったブランド『MOUNTAIN OF CLOTHES』

吉祥寺を含む、それぞれの参加者の住む街で集めた大量の古着を主体に、

バストリオのkurokimaiの絵をプリントした布を素材とし、舞台衣装としての衣服を制作をする試み。

出演者は出来上がった衣服を身にまとい『オープン・グラインドハウス』での日々を過ごした。

## MOUNTAIN OF CLOTHES

GakkunとKuroki Maiによる服飾ユニット。  
主に古着を主体にして衣服の制作を行なっています。  
吉祥寺シアターのレジデンスプログラム、  
バストリオ「オープン・グラインドハウス」という  
公開滞在制作企画から生まれたブランドです。

WEB:<http://moc2019.strikingly.com>



photo by WAKUIKOICHI

<h1>松本一哉</h1> <h1>ライナーノーツ</h1> <p>※全曲が聴けるQRコードは吉祥寺シアターに置いてあるフリーペーパーに記載、または公演会場などでCD販売しています。</p>		
<b>1</b>	<b>吉祥寺シアターへ行く</b> 吉祥寺駅前から吉祥寺シアターへ向かって歩きながら録音したテイク。	
<b>2</b>	<b>開場初日</b> オープングラインドハウスは吉祥寺シアターにて2018.12/10~12/15の6日間に開催されたのですが、オープン時間がpm12時。連日、扉を開けるといふ儀式のようになっていた。その初日の記録。	
<b>3</b>	<b>長机を作る</b> 初日、オープンしてから出演者全員が一斉に各々の制作にとりかかったのですが、美術の秋良さん、音楽家・デザイナーのタカラマハヤさん、役者の酒井さんを中心に、空間のど真ん中に、最後の晚餐にあるような長机を設置する為に長い時間をかけて机を製作する音が延々と鳴り続けていました。その不規則に鳴る作業音や話し声などに対してドラマでアプローチしてみたテイクです。最後あたりの酒井さん胡散臭い関西弁が面白かったのでダブ処理をしています。	
<b>4</b>	<b>アンちゃん</b> 初日と2日目にはアンちゃんという犬が滞在していました。アンちゃんが来場した際の記録。今野くんの言葉通り興奮してみたいですね。タンタン鳴ってる音は尻尾の音。その後は場に慣れたのか、アンちゃんはとても静かでした。	
<b>5</b>	<b>キッチン</b> オープン・グラインドハウスでは、吉祥寺シアターの厨房で出演者と来場者の方々の為に1人黙々と料理を作る男が居ました。その男の記録。途中で波紋音をちょこっとだけ鳴らしているのはやめておけば良かったのですが、それではなく、かなり混ざっちゃったのですが、料理の音に対してずっと音鳴らしてます。	
<b>6</b>	<b>食卓</b> 初日の晚餐の風景。長机に出演者全員が座っての晚餐の記録。	
<b>7</b>	<b>争い</b> とある食べ物を巡って大ジャンケン大会が突如勃発した際の記録。ちなみにこの争いに松本とタカラマハヤさんは参加していません。参加していませんといいますが、僕とタカラさんは先に食べてしまったからです。残り3つになってしまったその食べ物を争っている風景です。これだけ争うくらい求められたら、作った方々と食べ物も、してやったりだと思います。	
<b>8</b>	<b>grind</b> オープングラインドハウスに参加してみて、場の音が賑やか過ぎる場で、人を対象に作品作りをした事がなかったので 初日から困り続けました。そんなテイクです。途中からの銅鑼の音は3日目に吉祥寺シアターの3階にある稽古場で1人静かに録音しました。ただ、銅鑼の音が人の声にも聴こえるので、会場の録音を微かに入れてるかのようにも錯覚するかもしれません。銅鑼終わりにフェードインしてるので、そこは橋本さんと秋良さんと酒井さんの声が聞こえてきますが、途中には全く入れてません。ちなみにブツと銅鑼を切ったのは、この3人の声会場に居た人たちの中でとてもよく聴こえてくる音だったのでそうしました。秋良さんの笑い声はよく抜けるので大変悩まされました。笑 グラインドの意味を意識して編集しました。	
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> grind...(うすで)ひく,細かく砕く,すり砕く,すり砕いて作る,(硬いもので)磨く,とぐ,研磨する,ざしざしこする,(...)を(...)に)ざりざりとこすりつける,回す,粉をひく,うすをひく,(...)に)粉になる,ひける,(...)に)ひける,きしる,(...)で)きしる,ギーギーする,(...)に)精を出す,こつこつ勉強する,ひくこと,すり砕くこと,(粉の)ひき具合,つらい単調な仕事,退屈でいやな仕事,こつこつ勉強する学生,がり勉強,グラインド </div>	
<b>9</b>	<b>井の頭公園へ</b> 2日目。開始早々1人、井の頭公園へ。その時の録音テイクです。2日目にして屋外に飛び出しました。笑	
<b>10</b>	<b>鴨と口笛お爺さんとボート一家と時々俺</b> 井の頭公園の井の頭緑の井の頭公園駅に程なく近い池あたりで録音したテイクです。最初ら辺りに鳥の鳴き声のように聴こえる音はお爺さんが鴨に反応してもらいたくてずっと口笛を吹いている音です。お爺さんが吹いても全然鴨が鳴かないのでお爺さんは諦めて去っていったら鴨が鳴き出すという。笑 井の頭公園に滞在していたのはたかだか1時間程度なのですが、この場面に出くわした自分のひきの良さに嬉しく思います。	
<b>11</b>	<b>室外機</b> 吉祥寺シアター前にあるビルに室外機がかたまってる山あったので、そこで録った音と、井の頭公園から吉祥寺シアターに戻る際にたまたま見つけたやたら良い音が鳴ってる室外機があったので重ねてみました。	
<b>12</b>	<b>素粒子</b> grindという単語の意味を調べていたら、類語に素粒子という意味があったのでそんなタイトルにしました。3階の稽古場で録音した、よくパストリオの公演でも使用している音のなる砂時計で録音しました。無音ではありません。	
<b>13</b>	<b>継ぐ</b> 初日と2日目、秋山さんは舞台袖の楽屋で作業をしていたのですが、そこは他の出演者からの音の影響を殆ど受けない場だった事もあり、その作業音がとても良かったです。その記録。	
<b>14</b>	<b>Burundi</b> オープングラインドハウスでは来場者の何かと珈琲を交換するという試みが初日から行われていたのですが、その珈琲を淹れている音の記録です。普段とても抜ける声で話す橋本さんが、僕が音を鳴らしながら録音しているので、全然声を発さずに、最後に一言「出来ました」と言ったところにグッときました。	
<b>15</b>	<b>在室</b> オープングラインドハウスに出演した出演者全員が在室。そして、吉祥寺シアターのスタッフさん全員と来客者の方々が多数居た時の録音。一言一句聴き取る事が難しい賑やかな場の音。特別に際立っている音が無いので面白かったです。	
<b>16</b>	<b>不在</b> 在室とは逆に、出演者が秋山さんと岡村さん以外誰も居らず(この2人は出演者の中でも特に静かな2人でした)、吉祥寺シアターのスタッフさんも佐藤さんしか居らず、来客者は誰も居なかった時の録音です。在室と不在を比べてみて思うのは、長年屋外で自然の音を対象に作品を作ってきましたが、屋内で人を対象にして録音してみると、音の価値観がまるで反転していた事です。もちろんそれだけではなく、どちらでの録音も、これまでの経験からか初めは静けさを求めて、音と音との間を求めてタイミングを計っていたのですが、いざ録音を始めると、対象が人や街中だった場合、賑やかな場の音の不特定多数の賑やかさの方が面白く、録音テイクを聞き直した際にも在室の方が不在と比べると音をよく聴こうとしている自分が居ました。	
<b>17</b>	<b>閉場</b> 閉場時間はpm21時。閉場も連日儀式のようになっていました。このテイクは4日目の閉場の際の記録です。	
<b>18</b>	<b>Jingle Bells</b> 5日目、ふと気がついたら誰でも使用してよいマイクが会場に設置されていたのですが、来場した子供がそのマイクでずっと話していたら、不意に映像・撮影などで参加していた和久井さんがアコーディオンでジングルベルを弾き始め、子供が歌いだしました。最後に言っている「この虫籠には虫が入っていますか?」というのは、僕が設置した虫籠にマイクを立てていた展示物に反応した様子です。	
<b>19</b>	<b>レインボースプリング</b> 役者の小川さんが、来場者が珈琲と交換したレインボースプリングというパネのオモチャを、中央に設置された長机の端っこに段段を作り、その段にレインボースプリングを上手いこと転がすという事をパフォーマンスの際にやろうとしていたのですが、パフォーマンスの際に小川さん、橋本さんがチャレンジしたのですが上手くいかず、レインボースプリングと珈琲を交換した子供がやってみたら...という際の記録です。	
<b>20</b>	<b>テネシーワルツ</b> 美術の秋良さんが足りなくなった木材を調達しにいき、1人では抱えきれない量を運んでいました。帰り道、途中でバテていたところ、近所に住むお爺さんが手伝ってくれたそうです。その際、橋本さんがおじいさんにパストリオの活動について説明をしたところ興味を持ったそうです。お爺さんがコーヒーと交換したもののタグには「重い録」と記入してありました。そしてお爺さんが訪ねてきてくれたのは最終日のパフォーマンス中でした。ギターを片手に約束通りやってきてくれました。そしてテネシーワルツを歌ってくれました。その時の録音です。	
<b>21</b>	<b>珈琲と交換した歌</b> これまでのパストリオの公演に多数出演してきた役者の砂川さんが珈琲と交換したのは、砂川さんが2018年にインドに行った際のエピソードで、ヨガのレッスンの際に歌っていた歌でした。その歌をパフォーマンスの際にみんなで歌うという事になったのですが、その練習風景の記録です。	



Illustration:kurokimai

冬のテーブルここにいてこんなに過ごす

Layb

白木の長いテーブルの上に、等間隔に花が活けられている。

奥の方に、ごはんシチューのようなものをかけた食事が一人分置いてある。

表面が少し乾いてきていて、よそわれてから時間が経っているのがわかる。

テーブルの幅はちょうど70cm。テーブルを挟んで向かい合ったときに、

遠すぎず、近すぎず、話がしやすい距離なのだと、

ここに住んでいる人に教えてもらった。

女の人がやってきて、テーブルの上の花をひょいひょいと手に取ると、

どこかに持って行ってしまった。今日は引越しの日なのだという。

確かに、家の中にあるものを一つずつ運び出しているようだ。

見ているうちに、テーブルも解体されて、いくつかの板と角材になった。

さっきのシチューはどこへ行ったのだろう。

ドアが開いて、冷たい空気が入ってくる。家の中がだんだん寒くなっていく。

私もそろそろ帰る時間なのかもしれない、と思いながら、

この家にあったものをもう少しだけ見ていようと思った。

原 麻理子  
パストリオ[YOUNG YOUNG MACHINES]に出演。コピーライター。俳句を書きます。

## みらいの手づくりハンコ



Photo : kurokimai

スタンプラリー「みせびらき」のハンコと、オープン・グラインド

ハウスに遊びに来てくれたみなさんが作ってくれたハンコ。

おさかな、くま、10円玉などなど...

個性的なハンコがいっぱいできました。

## すべての時間を目撃することは出来ない

### 綾門優季

劇作家・演出家・青年団リンク キュイ主宰

パストリオ『オープン・グラインドハウス』のすべての時間を把握

することは無理に等しかった。一日だけ見逃したわたしはおろか、

ずっとそこにいたはずの関係者さえもが絶えずあちこちで生み出

される断片だけを目撃し、そこで何が起こっていたのかを把握し

ている者は、もしかしたらこの世界に誰一人としていないのかも

しれない。数時間そこにも数分そこにも、気になるのは

わたしのいた時間ではなく、わたしのいなかった時間だった。

わたしは今から目撃することの出来た時間だけを語る。それは

作品全体を見通してはいないかもしれないが、確かに世界に現

れた細部だ。そして世界はいつでも細部に宿るのだ。

Day 5

思い出の品と引き換えにコーヒーをいただける場所が『オープ

ン・グラインドハウス』にはある(綾門はコーヒー好きであるに

もかわかわらずコーヒーアレルギーなので、代わりにオレンジジ

ュースをいただいた)。Day1に同じ吉祥寺シアターで奇遇にも

前日に上演されていたわたしの戯曲『景観の邪魔』の1シーン

「愛着」と引き換えにオレンジジュースをいただいた時にはま

ばらにポツポツと品物が置かれていた場所は、今では有象無

象のものでごった返していて、知らない民族の神棚のようになっ

ている。そのひとつひとつの札を眺める。札にはそれぞれの来

歴が書いてあるのだ。何も括り付けられていない札には、ここ

で歌が歌われたという説明があり、その歌を聞きなかったなど

思う。でもその歌がここで歌われたことについて思いを馳せる

ことは、その歌を聞いていては出来なかったことでもあるので、

これはこれでいい体験である気もする。

Day6はスケジュールの都合で行けない。それを最初から知っ

ていてDay5まで毎日通っていたことを吉祥寺シアターの方に

伝える。スタンプが一日だけ押されていないフライヤーは手元

にある。パフォーマンスはみられなかった。たとえ再演されると

しても、この空間がこのように存在するなかで行われるパフォー

マンスは、この世界では永遠に失われた。

# オープン・グラインドハウス、

## 五日目について

文：今野裕一郎

「オープン・グラインドハウス」を始めるにあたってどのような六日間になるのかを想像してみた。街に劇場を開いていく、面白そうだけど難しそう。何故かというところがゴールかなんてわからないものだから。劇場がどこまで街や人に対して開けるのか、普段演劇をまったく見ない人たちにここで会うためにはどういう作戦が必要か、そもそも何故劇場に來ないお客さんを吉祥寺シアターに呼ぶ必要があるのか、公共施設がもつ可能性について考えを巡しながら、シアタースタッフの四人と搬入口を開けてそこが入り口となることだけは決めた。吉祥寺の街を見つめながら準備は進んだ。

ただ僕は違うことも考える。そのような環境で続けていくことは困難なことだ。なにより継続した活動を志向していく時、表現において他者と出会うことが自分の根底にある何かであって、価値観が違う他者と向き合っただけで起こる戸惑いや混乱こそが、社会と表現の関係を思考しながら表現するドキュメンタリー映画から学び表現を始めた僕にとって重要なことだ。他者がいるかどうか。

5日目は「劇場」がテーマだった。長テーブルを劇場中央にこしらえて、毎日のようにそこで参加者とご飯を食べて会話を楽しみ街の人と出会い続けた。街の人たちはこの劇場に入ることがない人ばかりだった。劇場であるかさえ知らなかった。そして5日目、この日はパフォーマンスを予定していた。劇場に観客が集まってくる。当たり前だ、告知してからの日パフォーマンスに来てくれた人たちはこの五日間訪れていた人たちと決定的に違っていた。客席にほぼ一直線に向かっていた。これまで来てくれた街の人たちには演劇を見ない日常があつた、ここが劇場であることなど関係なくこの空間にいた、しかし観客としてこの日来た人たちは今まで誰も座らなかった客席に当たり前のように座り、何かが始まるのを待っていた。これは大変なことになった。何故なら僕たちの本番はもう始まっていたから。そして初めて出会う観客の前で改めて始まるものとはなんだろうと戸惑った。わかつていたはずなのにわかつていなかった。見せたいものは見せることができない。とても複雑な状況がここには生まれていた。

僕たちは吉祥寺シアターに暮らしていた。ここは生活の場となり五日間過ごすだけで意識は変容していたことにこの時気付いたが時すでに遅く、違和感を持ったままパフォーマンスの時間は始まった。参加者はいつものようにとして引き裂かれていった。客席には劇的なものを期待してくれるお客さんがいて、反対方向の搬入口からは日常の延長線上でやってくるお母さんや子供達が入ってきて、観客席から沢山の人が見つめていても関係なく、舞台上に当たり前のように入ってくる。そして僕らに挨拶を交わしてテーブルについた街の人たちは出入りも自由に舞台上でのんびり始めたのだ。これらの現象の間に挟まれ右往左往しながら本番は予定をオーバーして1時間45分経っていた。客席には退屈があつたかもしれない、舞台上には参加者の引き裂かれた意識と体が揺られていて、搬入口からは日常が続いていた。この日は「劇場」だった。まさに劇場の仕組みと出会ったのだと思う。大きな劇場にやってくる観客が作る空気は強固なものだった。劇的なものと抗って過ごす時間そのものがパフォーマンスだった、でも、きっと、劇的に見えていたし、そうなる人、街で暮らして劇場を通り過ぎていく人の間にははっきりとした境界線はある。でもその境界線そのものの上に僕たちはいた。そのことから思考は始められる、そういう体験をした。これからだ、「オープン・グラインドハウス」は。



### BRÜCKE

自家焙煎のスペシャルティコーヒーの店。  
ときどき催しもあります。  
トーストなどの軽食あり。ドッグ同伴可。

月火定休 平日 16:00-21:00 土日 13:00-19:00  
足立区小台 2-17-11



### SHI-TEN

気軽に寄れるコーヒースタンド。  
お菓子も毎朝焼いています。  
お弁当を持ち込んで食べることもできます。

日曜定休 平日 8:00-18:00 土 10:00-17:00  
千代田区外神田 5-4-12



出張ごはんとお菓子



### 出張ごはんとおかし ニャー

ニャーは奄美大島のことばで貝のこと。  
あるときはギャラリー、あるときは小劇場、あるときはお蕎麦屋さん、  
場所をてんてんしながら、行きたいところの食べたいごはん、お菓子をつくっています。  
お会いできたら、うれしいです

WEB: <https://nyahiroi.tumblr.com>

